

園内研修における「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共有と意識の変容 —写真からこどもの育ちをふりかえることを通して—

寺 山 陽 子

(京都教育大学大学院教育学研究科 修士)

Sharing of “What We Want Children to Develop by the End of Early Childhood” in Kindergarten Training and Alteration of Consciousness —Through Reflecting on Children’s Development with Photographs—

Yoko TERAYAMA

2024年9月24日受理

抄録：2023年2月，中央教育審議会にて，「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」がとりまとめられ，「“10の姿”を連携の手掛かりとして活用すること」「子供の姿の事例を通して対話すること」「資質・能力のつながりについてイメージを共有することで共通認識を図っていくこと」などについて言及されている。本研究においては，“10の姿”の視点から継続的に園内研究にかかわったY市C幼稚園における実践と年度末に実施した園教職員へのアンケート調査結果をふまえ，園教職員の意識の変容について考察した。写真や事例をもとに“10の姿”をさまざまな視点から共有・意識することで，「無意識の意識化（日常の“あたりまえ”の意味づけ）につながる」「“こども理解”が深まる」「こどもを“みとる視点”がひろがる」「教職員の関係性が深まる」ことが示唆された。

キーワード：幼児期の終わりまでに育ってほしい姿，10の姿，ドキュメンテーション，園内研修，架け橋

I 研究の背景および目的

2023年2月，中央教育審議会初等中等教育分科会にて，「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の協働による架け橋期の教育の充実～」(中央教育審議会, 2023) がとりまとめられた。ここでは，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 (10の姿)」について，「到達目標と誤解され，連携の手掛かりとして十分機能していない」という課題をはじめ，「幼児期の遊びを通した学びが小学校の学習にどのようにつながっているかについて，幼保小の先生が子供の姿の事例を通して，具体的に対話することが重要になる」「幼児期に育まれた資質・能力が小学校教育にどのようにつながっているか，関係者がイメージを共有し，実践できるようにする必要がある」などと言及されている。

筆者はこれまで小学校教諭の立場から，大学院にて幼小接続について研究し，幼児教育施設・小学校関係者へのアンケート調査をもとに現状と課題・今後の方向性を修士論文として分析・整理 (寺山, 2022)，その後，「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について (二，現状と課題，目指す方向性 1～5)」をもとに，“幼小かけはしコーディネーター”としての活動実践をふまえ，幼児教育施設と小学校をつなぐコーディネーターの意義と役割について考察した (寺山, 2024)。その結果，存在意義として「関係性・相互理解の促進」「意識・認識・実践力の向上」「物理的・心理的負担の軽減」をはかるために，“こどもの“姿”をつなぐ”““おもい”や“ねがい”をつなぐ”“保育・教育実践をつなぐ”“関係性をつなぐ”役割があることが示唆された。

本研究においては，2023年8月の教職員研修をきっかけとして，“10の姿”の視点から継続的に園内研究にかかわったY市C幼稚園における実践をふりかえりたい。さらに，年度末に実施した園教職員へのアンケート調査結果をふまえ，“10の姿”を共通の視点として，写真や事例をもとに実際のこどもの姿をふりかえることを通して，さまざまな立場や視点から“みとり”を共有することによる園教職員の意識の変容について考察したい。

Ⅱ Y市C幼稚園における主なかわり

1 Y市C幼稚園について

Y市にある私立C幼稚園は、昭和41年に設立された。美しい緑に囲まれ、図書館・文化会館・体育館といった公共施設も近く、フェンス越しには隣接の小学校の運動場が見え、教育環境として非常に恵まれた地にある。

令和2年4月には、木のぬくもりに包まれた新園舎が完成し、「遊びを通した学びを大切に、設定保育をくずしていくこと」「小学校との連携を、気軽に行き来できる日常的なものにしていくこと」をはじめとして、園の特色を生かした保育実践のありかたについて、“10の姿”を意識しながら試行錯誤を重ねている。

2 園内研修（2023年8月）

2.1 内容

夏休みの園内研修にて、“10の姿”について話をしてほしいという依頼があった。そこで、『指針・要領における幼小の「資質・能力」のつながり～幼児期の経験を小学校につなげるために～』というテーマで、筆者が事前に保育の様子を参観して撮影した写真等をもとに、“10の姿”や小学校とのつながりをふまえ、架け橋期に大切にしたいことについて伝えた。

2.2 成果

中央教育審議会(2023)において、「子供が主体的に遊ぶ姿や学びの過程について、写真や事例のドキュメンテーション等の活用により具体的に可視化を行いながら研修を行うことで、先生同士の子供理解が深まったり、保育への手応えややりがいが高まったりするなど、一層効果的に実施することが可能になるとの報告がある」と言及されている。園教職員の感想〔表1〕からも、知っているこどもたちの日常場面の写真とつなげて“10の姿”が言語化されることで、“10の姿”について「到達目標ではない」ことをふくめ、イメージをともなった実感的理解が促進されたことが推測される。また、筆者がとらえたこどもたちの“つぶやき”や“やりとり”から、普段の無意識の保育のなかにも“10の姿”につながる環境やことばかけがたくさんあり、主体性・思考力・創造力・言語力など多様な育ちにつながっていると感じ、意識づけにもつながったようである。

“10の姿”を共通の視点として、小学校という異なる立場から保育をとらえ、共有することは、園にとって新たな“みとり”の視点の獲得にもつながると考える。また、“10の姿”が、「こどもの育ちをとらえる視点」「日々の保育をふりかえる視点」となり、その後の実践に生かされていくことが期待される。

3 保育参観（2023年9月～2024年3月）

3.1 内容

8月の園内研修以降、定期的に園を訪問して日常保育や行事（運動会・劇・作品展・卒園式）を参観した。訪問日時については幅をもたせて決めておき、おたがいの状況に応じて柔軟に変更等できるようにした。

いくつかの行事の参観後は、「こどもの姿」「保育内容・方法（環境）」「先生の声かけ・かわり」「個々のつぶやき」について気づいたことを“10の姿”で整理してまとめて園に届けた。また、日常保育の参観では、写真を撮りながら、こどものつぶやき等を記録し、印刷した写真に一言コメント（こどものつぶやき・筆者の気づき等）を添えて届け、継続的にこどもの姿を共有していった。

3.2 成果

中央教育審議会(2023)において、「一人ひとりの子供を丁寧に見取ることができる精神的・時間的な余裕のある勤務環境を確保する必要がある。しかし、実態としては、勤務時間中には、先生が集まって話し合う時間や日々の子供の記録を取る期間すら無いほど多忙であると指摘されている」と言及されているように、保育をしながら記録をとることは現実的に容易ではなく、筆者がまとめた記録や気づき等は大変好評だった。特に一言コメントを添えた写真は、「こんな場面があったのかあ」「こんなことつぶやいていたのかあ」「おもしろい」と盛りあがっていたようで、届ける度に「次回も楽しみにしています」「またいつでも来てください」という声があった。

そして、日常保育の参観では、「何時まででも自由にまわってください」と声をかけていただき、日によって参観時間を変えながら、登園から降園までの1日の生活の流れを知ることができた。また、「日常の自由あそび」

〔表1〕園内研修における園教職員の感想

気づいたこと・感じたこと・考えたこと…など	今後の実践において意識したいこと・生かしたいこと…など
10の姿を写真を使ってわけてみせてもらい、普段の遊びのなかでも、しっかりと10の姿ができていたのだなと思った。 何気ない言葉をかけているときでも、10の姿のなかには入っていることに初めて気がついた。	これからの保育のなかで、意識をして言葉かけや制作を進めていきたいと思う。
写真に子どものつぶやきが書かれていたり、“10の姿”をもとに子どもの姿がわかれていて、わかりやすかった。 普段の子どもの様子が自然と“10の姿”にきれいにわかれていて、日々の何気ない自由遊びも“10の姿”としてみて考えていけると感じた。	行事や普段の生活も、“10の姿”を考えながら進めていくことも必要だと感じた。
お話をきいて、日々の保育実践と「10の姿」がかけ離れていないことを確信した。普段はぼんやりとしている「10の姿」が、写真を通して、より明確になり、特に先生の視点から多くの気づきがあった。 保護者に幼児期の大切さを伝える際のヒントにもなった。（写真横のひと言コメントも「なるほど!」で参考にさせてもらいます）	参観、入園説明会等、保護者への発信時に意識的に「10の姿」とからめて伝えていきたいと思う。 次回の研修も楽しみです!!
10の姿について知ってはいたが、初めて写真を見て、遊びのなかでたくさんの10の姿があることに気づくことができた。 自分が意識せずに発した言葉かけでも、子どもたちには10の姿につながることもあって、子どもたちも言葉をよく覚えているのだなと感じたので、ひとつひとつ丁寧に言葉をかけていくことも大切にしたいと思った。 ひとつの遊びがどんどんひろがって、友だちにもひろがっていくなかで、あらためて遊ぶ環境づくりの大切さを感じた。	今後、遊びのなかで子どもたちが興味をもったことに対して、どうひろげ、友だちにも興味をもってもらえるのか考えながら、環境づくりや言葉かけを行っていく。写真などをとり、10の姿にあてはめながら、自分自身の新たな発見や反省につなげていきたい。 写真ひとつひとつがわかりやすく、すぐよい研修に参加でき、嬉しく思います。
幼稚園教員、保育士、小学校教員ともに、就学前に身につけておくことが重要だという項目で、『たくさん遊びを経験する』の割合が特に高く、多様な実体験（あそび）を通して“自然に身につく”“気づく”その積み重ねが、小学校以降の学習につながる（その体験が少ないとつまずきに弱い子どもになる）ということを知り、今の“あそび”の段階で失敗や成功体験・考えたり疑問に思ったり調べる等の子ども主体の経験をたくさんさせてあげられることがよいのだと感じた。 『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）』は、先にねらいをたててしまっ、子どもをそこに到達させるべく保育内容を考えるのではなく、ひとりひとりの発達の特長に応じて育っていくもので、決して到達目標ではないこと、また、すべての子どもに同じようにみられるものではない（そして、入学前5歳後半頃～みられる）こともわかった。 『10の姿』の1つの項目に対して、ある子どもの姿や気づきも1つ以上にあてはまったりもすることもあった。	『10の姿』の③協同性や⑤社会生活との関わりでも例にあげられていた、友だちのやっていることをそばでみていて、最初は参加しないが牛乳パックを使いだすと興味をもって入ってくる姿の話から、そばにいる、近くでみている、それだけでもかかわりのひとつの方法で、その子なりの参加方法だと学べたので、子どもたちの遊びのなかで入りにくから誘うだけでなく、あえてその子の入りたいタイミングがあるかもしれない、そして、その子なりに友だちの様子をみて楽しんでいるのかもしないことを頭にいれて、見守ることもしていきたい。 行事などの子どもたちの姿を後程『10の姿』にあてはめて、学年の先生方と今の成長段階や気づきを共有して、保育内容にも生かしていきたい。また、遊びをたどるのではなく、子どもたちの考えや疑問に思うきっかけづくりなどもふまえて努めていきたい。
幼児教育から小学校教育へと変わっていくなかでも、全く別のものになるわけではなく、幼児期の生活があってこそ小学校へつながっていると改めて感じた。 また、10の姿が生活のさまざまなところにあり、遊びや経験をたくさん積み重ねることが大切だなと考えさせられた。	10の姿を意識しつつ、子どもひとりひとりにあったかかわりをしていきたい。
今までは、10の姿、難しく考えていたが、先生の話をして、今の子どもたちの姿が必然とその姿にあてはまることを学び、新たな気づきとなった。	学年で振り返る際に、10の姿のどこにあてはまるのか、まずは、そういった視点で子どもたちの姿を振り返り、学びにつなげていきたい。
普段生活しているなかでは気づけないような子どものつぶやきを写真や10の姿を通してみることで、子どもなりに毎日いろんなことを考えたり感じたりしてすごしているんだなと思った。	「10の姿」と言葉だけだと難しく捉えがちだが、今回写真を通して、日常生活を送っているだけでも育っているところがあったんだと思うことができた。 これからさまざまなことに興味をもち、幼児期にしかできない経験ができるような保育をこころがけていきたい。
幼児教育は「環境を通して行う」ことが基本であり、自ら積極的にかかわっていけることが大切である、そしてどのように保育していけばいいのか考えたときに、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないというお話は、その通りだなと思った。なぜならば、実際、触れることにより、温度や感触が脳に伝わり、子どもの記憶にも残ると考えられるからである。この経験は、後に小学校へ行って、何かに悩んだときに、解決の糸口になるだろうと思った。そして、これが、生きる力となっていくんだなあとも思った。 また、“10の姿”も勉強になった。	「環境を通して行う」ということを意識するとすれば、子どもが“今やってみよう”と思えるような環境を整えていきたいと思う。そのなかで、遊びを見守ることを意識し、アドバイスをするときには、まず一呼吸おき、子どもに、考え、選べるような言葉づかいをしていながら、遊びと遊びがつながっていくようになればと思った。
以前、保幼小連携の際に考えた幼小連携の内容を10の姿にあてはめてくださと言われたが、難しく考えすぎてあてはめることができなかった。しかし、先生が子どもたちの様子を写真とつぶやきを入れて10の姿にあてはめ説明してくださり、“これもこの姿にあてはまるのだ”と発見や気づきにつながった。 また、10の姿は先にねらいをたてると到達させようとしてしまうので、活動の途中や終えてから、どこが育ったのかあてはめていくほうがよいことがわかった。	職員間だけの共有でなく、今、子どもたちに育っている姿を保護者にも発信していき、共有していきたいと思う。 決まったカリキュラムをこなすだけでなく、職員間で子どもたちの姿を思い返し、振り返りをしていきたい。
学生時代～新任～…現在に至るまで、保育・育児・教育のありかた等が時の経過とともに、どんどん変化していることに常々感じており、今回の研修においても、そのことを改めて考えさせられる時間となった。	子どもたちが受け身ではなく、何事においても、主体的に考え行動できるよう…子どもたちにかかわる大人のわたしたちが、先回りすることなく、環境を整えながら接していきたいと思う。
園での様子を小学校の先生にみていただき、交流・共有できる機会があればいいと思う。日常の遊び・活動のなかでの育ちや成長の過程を共有していけたらと思う。	幼稚園でしかできないさまざまな体験が、いちばんの学習意欲になるという現場の先生の思いをつなげていくよう、日々の園生活を大事にしていきたい。
子ども自身が“自ら育つ”力があることを信じ、発達段階（各自もふくめて）を理解し、環境づくりや言葉かけを意識する大切さを再確認させてもらった。 適切な援助によって、子どもが主体となり、日々の積み重ねで体験し学ぶことで力をつけ成長することを忘れず、私自身のかかわりかたを考えていこうと思った。	2学期になり、園生活を身につけた子たちには少し考える言葉かけ、援助が必要な子にも急ぐ必要のないときには最後まで見守りつつ、やりとげることがができる環境にし、自信をつけられるかわりにする。 これらの積み重ねから、自ら次の遊びや楽しみの向かえるような活力ある姿がみられるよう、個々の成長に気づき、認め、伝えていきたい。
とても難しく考えすぎていたと思い、毎日の園生活のなかで10の姿があるのだと感じた。先生がつくってくださった10の姿（園の生活から…）も、あーそうだ、これもこれも、と感じ、わたしもそういう発見をしていけたらと、毎日ワクワクドキドキしてみようと思った。 やはり、小学校との連携が大切…まずは小学校を知る意味で、わたしたちも小学校へいかなければならないと思った。	小学校とどう連携をとっていくか…わたしたちの幼稚園の生活を知ってもらうことも必要だと思い…少しずつこの距離が短くなっていけばと思う。

「クラスでのあそび」「給食」「行事」「異年齢交流」「隣接小学校との交流」「未就園児事業」など、さまざまな場面を参観できた。さらに、継続的に訪問することで、教職員・園児にとって「珍しい外部のお客さん」ではなくなり、いつ訪問しても“ありのまま”の日常保育を参観できたことは、筆者にとっても大変貴重な経験となった。

異なる立場の視点から継続的にとらえたこどもの姿を中心とした記録は、園にとって新たな視点もふくめた客観的な保育記録として残る。そして、個や集団としてのあそびを通した学びや育ちの過程を詳細にふりかえりながら、ねらいや意図、迷いや葛藤などをふくめ、多様な視点から“みとり”を語り合い、実際のこどもの姿からともに考え続けるきっかけとなることが期待される。さらに、語り合う関係性が深まるにつれて、おたがいの保育・教育について素朴な疑問を尋ねたり、あそびと教科学習のつながりをとらえ、それぞれの“ねらい”や内容の工夫を共有したりするなど、“無知”“未知”が“既知”に変わり、幼小のつながりが明確化していくと考える。

4 作品展の取り組み（2024年1月－2月）

4.1 内容・こどもたちの様子

2月、園全体が会場となり、こどもたちがあそびを通して制作した1年間の数々の作品が、配置などを工夫して展示される。そのなかで、個々の作品がクラスの作品となり、クラスの作品が園全体としての作品となってホールに展示される協同制作の過程において、今年度は「ホテル」をテーマに、“10の姿”を特に意識し、また、写真を通してふりかえることに園として取り組んでみようということになった。期間中、筆者も何度か様子を参観し、ある5歳児から「カメラマン？」ときかれたほど、次第に“カメラマン”としてとけこんでいった。

制作過程〔図1〕では、はじめは日常のあそびと同様の雰囲気のもと、個々に好きなものを作ってあそんでいると思っていたが、だんだんと「ホテル」という園全体の大きなテーマがあり、個々やグループでイメージしたものを作っていることに気づいた。そして、それぞれが作ったものが「ホテル」というテーマでつながり、組み合わせや配置などを試行錯誤しながら、より“ホンモノ”に近づけたいという気持ちがふくらむとともに、さらにイメージやアイディアがひろがっていた。あちらこちらで会話（やりとり）が生まれ、さらに必要なものを考えながら、自然と役割分担ができていた。また、同じ空間をとともにすることで、ともだちの発想に「おもしろい」「すごい」と感じると、他の場所にいるともだちや先生に伝えにいくなど、全体としてのイメージがどんどん高まっていく様子がみられた。こどもたちの発想から、ホテルに必要なものが作られていき、先生はそのイメージを実現するために必要な材料等を準備しながら柔軟に環境を整えていることを感じた。

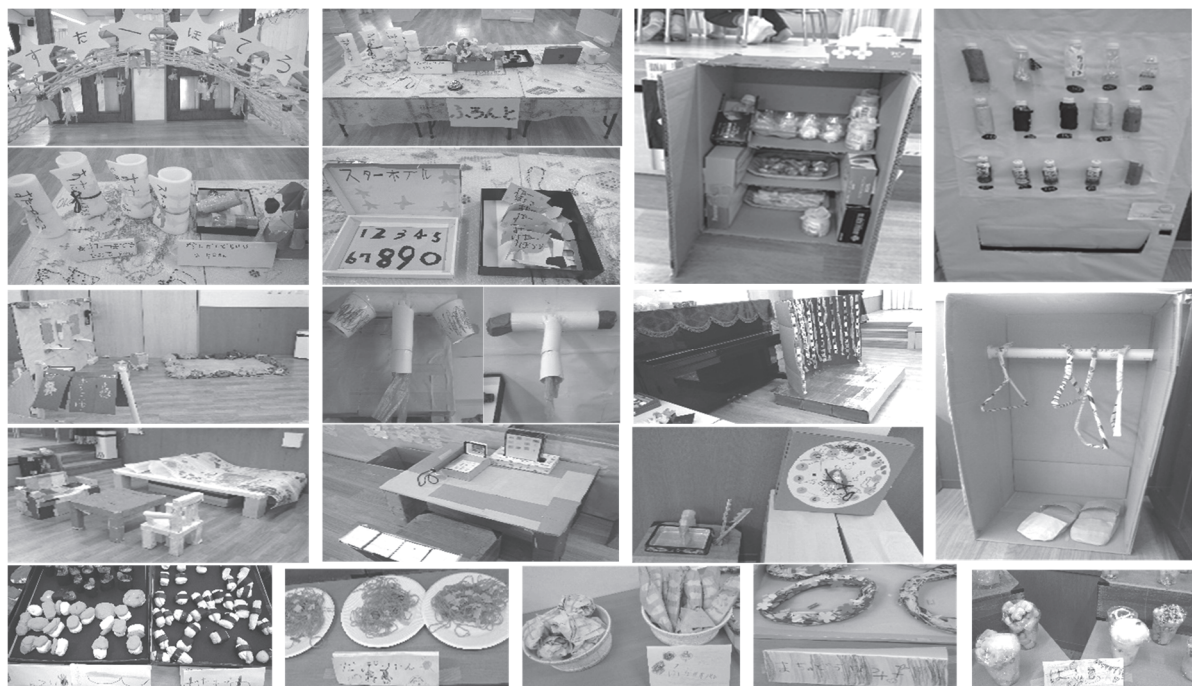


〔図1〕作品展に向けての制作過程

取り組みを始めて数週間後、「ホテルの名前は？」「という先生の問いかけに、こどもたちからはいろいろな案があがり、話し合いの結果「スターホテル」に決まった。そして、作品展の数日前、実際の会場にそれぞれが作ったものを運び込み、そこからさらに必要なものを考え、制作は続いた。全体の雰囲気からイメージがますますひろがり、異年齢の作品からも刺激をうけたようで、フロント（パソコン・部屋のカギ・販売用タオル・貸出用ドライヤーなど）、売店（商品表示）、部屋（テレビ・スリッパ・花・部屋番号表示）、レストラン（メニュー表示・トング）、温泉（のれん・シャワー・いす・シャンプー類）など、次々とアイディアが生まれていた。あ

る3歳児が落ちていたゴミを拾い、「あっ、“ホテルの”ゴミや」とつぶやいていたほど、こどもたちも、そして筆者自身も本物のホテルにいるような感覚になっていた。このような過程において、“必要感”から多くの文字・数字・図形などが自然に用いられている場面も多くみられ、スターホテル〔図2〕が完成した。

参観を重ねるについて、「スターホテル」の世界にひきこまれていき、制作過程における試行錯誤の様子や作品にこめられた“おもい”を身近で感じとってきたことで、作品展当日は、ひとつひとつの作品の細かい部分もふくめ、こどもたちのさまざまな表情や声があふれるように想起された。



〔図2〕作品展スターホテル会場

さらに、作品展の後には、〔図3〕のように同年齢や異年齢で実際にホテルで過ごす（あそぶ）時間を数日間設けていた。異年齢で過ごす時間には、5歳児が「どれがいい？」などと気もちをききながら食べ物を選んだり、たくさん選んでいると「重くなるよ」と言いながらも何とか全部お皿にのせようと試行錯誤したり、「熱いよ」とフーフーと冷ますなど、あたたかい言葉かけが多くみられた。普段の園生活のさまざまな場面において、先生がこどもたちの気もちをていねいにうけとめ、耳をかたむけ、尊重しながら、あたたかい関係性を築いている様子があり、そのようなかわりを通して5歳児自身が感じとっていることが、異年齢とのかかわりに生かされていることを感じた。また、あそんだ後は、次のグループのためにホテルを復元し、その様子からは「自分たちが気もちよくあそぶことができたから、次のグループにも同じように…」という自然な気もちが伝わってきた。



〔図3〕作品展後のあそび

4.2 成果

取り組み全体を通して、ひとりひとりの家庭背景もふくめたこれまでの経験が知恵となって融合され、グループや園全体としての試行錯誤の過程を支えていた。多様な「もの・ひと・できごと」とのかかわりが生まれる環境のもとで、主体性や創造力が次々とひきだされ、イメージのひろがりと思考の深まりがくりかえされることで、“ホンモノ”に近づくと同時に、よりよいアイデアが次々と生まれ、オリジナルの作品として生きてきていた。さらに、完成後の作品で実際にあそぶことで、作ったものや空間がより生かされ、こどもたちも空間もますます輝いてみえた。このような過程を通して、“結果ありき”ではない「個別最適な学び」と「協働的な学び」が相互に深まっていくと考える。



〔図4〕作品展当日の掲示

作品展当日は、〔図4〕のように、「こどもたちが描いたホテル設計図」、筆者がまとめた記録方法がヒントとなって「これならできそう」と「園教職員がまとめたこどもたちのコメントつき“10の姿”の写真」、あわせて筆者が「8月の職員研修で用いた“10の姿”の写真」「継続的な保育参観で撮影した一言コメント付きの写真」も掲示されていた。いずれも、共通の視点を通した継続的な取り組みの“過程”が、自然な“結果”としてつながった成果物であるといえる。また、各会場には園教職員がローテーションで常駐し、作品や掲示を通して、こどもたちの姿などについて保護者との会話が自然と生まれていた。写真コーナーでは、「コメントが面白い」「こんなこと言っていたの」と笑いながら夢中でみている保護者が多く、親子の会話のきっかけにもなっていた。

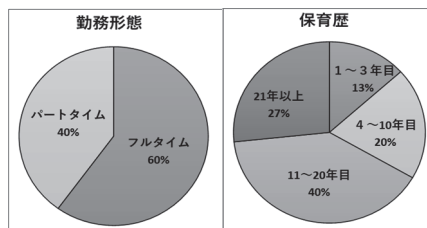
中央教育審議会(2023)において、「幼児教育施設においては、ICTを活用したドキュメンテーションやポートフォリオといった子供主体の遊びを通した学びの記録により、日々の教育実践や子供の学びを「見える化」し、先生の教育の意図や環境構成の工夫等を併せて伝えることにより、幼児教育の特性や教育方針等について、保護者や地域住民の理解を深めて信頼を得る取組が行われてきている」と言及されている。「写真」があることで保護者・関係者等の目にもとまりやすく、さらに“こどもの姿(つぶやき)”など学びの過程をみとることができるような工夫によって、幼児教育の見方・考え方の理解の促進、そして、こどもの育ちを“みとる”視点の共有が図られ、“こども理解”の深まりにつながっていくと考える。

Ⅲ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関するアンケート調査

1 調査の概要

2024年3月、Y市C幼稚園全教職員対象に、“10の姿”についての意識の変化を把握することを目的としたアンケート調査を実施した。

調査内容への回答は選択式とし、最後に「“10の姿”と保育実践(質向上)」について任意の自由記述欄を設け、15名の回答を得た。なお、回答者の基本的属性は〔図5〕の通りである。



〔図5〕回答者の基本的属性

2 調査内容・結果・考察

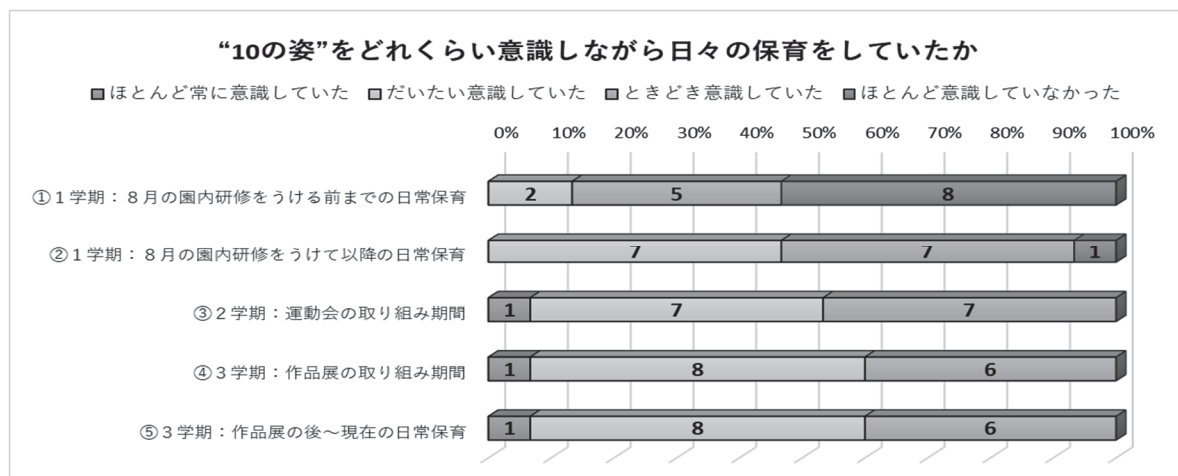
2.1 日々の保育における“10の姿”の意識の変化

①8月の園内研修をうける前までの日常保育(1学期)、②8月の園内研修をうけて以降の日常保育(2学期)、③運動会の取り組み期間(2学期)、④作品展の取り組み期間(3学期)、⑤作品展以降の日常保育(3学期)、それぞれの期間において、「“10の姿”をどれくらい意識しながら日々の保育をしていたか」について尋ねたところ、〔図6〕の結果となった。

園内研修の前まで、約半数の教職員が“10の姿”をほとんど意識していなかったが、園内研修をきっかけに、ほとんどの教職員が何らかの意識をもつようになり、さらに行事を通して意識が高まっていったことがわかる。

園長先生のリーダーシップのもと、全教職員が集まる貴重な機会である園内研修において“10の姿”を視点と

して継続的にとりいれ、特に行事においては、“10の姿”をもとに語り合うことを通して、視点や方向性について共通認識をはかりながら取り組みを進めていったことで、意識の持続・向上につながったと考える。



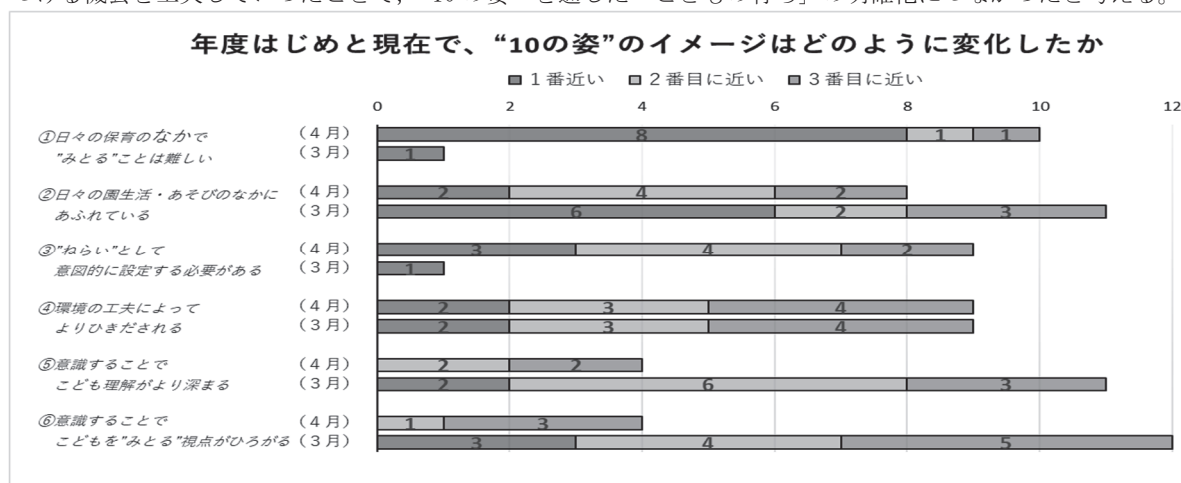
〔図6〕“10の姿”をどれくらい意識しながら日々の保育をしていたか

2.2 “10の姿”のイメージの変化

「年度はじめ（4月）と現在（3月）で、“10の姿”のイメージはどのように変化したか」について、①日々の保育のなかで“みとる”ことは難しい、②日々の園生活・あそびのなかにあふれている、③“ねらい”として意図的に設定する必要がある、④環境の工夫によってよりひきだされる、⑤意識することで子ども理解がより深まる、⑥意識することで子どもを“みとる”視点がひろがる、それぞれの項目から各時期のイメージに近い順に3つずつ尋ねたところ、〔図7〕の結果となった。

環境の工夫によってよりひきだされることについての認識は、幼稚園教育が基本として大切にしていることでもあり、大きな変化はみられないものの、“10の姿”を意識することによって、日常にあふれていることの再認識や実感の深まりにつながったことが推測される。また、4月の時点では、半数以上の教職員が、日々の保育のなかで“10の姿”をみとることは難しく、“ねらい”として意図的に設定する必要があると感じていたことがわかる。一方で、4月は最もイメージが低かった「“子ども理解”が深まる」「子どもを“みとる”視点がひろがる」ことに関して、3月の時点では、ともに3倍近くに増加し、イメージが最も高くなっている。

園内研修きっかけに、日々の保育実践から実感をともなって“10の姿”をイメージできるように継続的に意識づける機会を工夫していったことで、“10の姿”を通した「子どもの育ち」の明確化につながったと考える。



〔図7〕年度はじめと現在で、“10の姿”のイメージはどのように変化したか

2.3 写真を用いて“10の姿”で語り合うことの意義

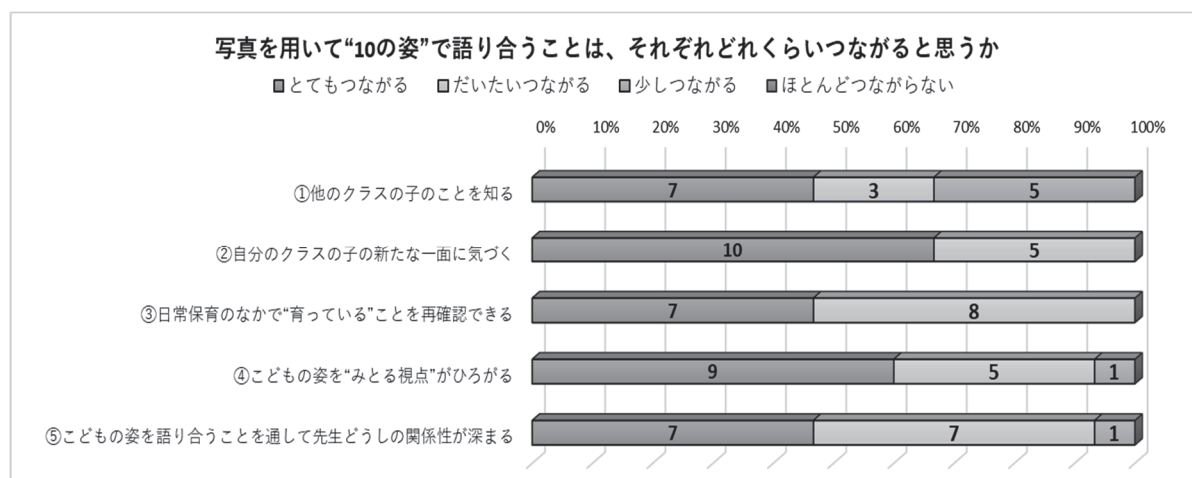
「写真を用いて“10の姿”で語り合うことは、それぞれどれくらいつながると思うか」について、①他のクラスの子のすることを知る、②自分のクラスの子の新たな一面に気づく、③日常保育のなかで“育っている”ことを再

確認できる、④こどもの姿を“みとる視点”がひろがる、⑥こどもの姿を語り合うことを通して先生どうしの関係性が深まる、それぞれの項目について尋ねたところ、〔図8〕の結果となった。

いずれの項目においても、半数近くの教職員が「とてもつながる」と感じており、また、ほとんどの教職員が、“10の姿”を視点として写真を用いて語り合うことのさまざまな効果を実感していることがわかる。

8月の園内研修をきっかけに、園長先生の「とりあえずやってみよう」「いろいろ試しながら考えよう」という声かけのもと、“10の姿”を視点とした研修のありかたを試行錯誤する過程においては、事前に“ねらい”として“10の姿”をイメージすることは難しく、やはり事後に“10の姿”でふりかえって“みとる”活用のしかたが有効であることを多くの教職員が実感していた。また、日常の姿をとりあえず写真にとってみると「個人」としての姿のみとりになりがちで、友だちとのかかわりの場面の写真が少ないことに気づいていた。そして、日常の保育のありかたを見直すとともに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が相互に高まる機会でもある作品展の取り組みをひとつの機会として、全教職員で写真をもとに“10の姿”を共有していった。その際も、「〇時に△に集合ね」と気軽に声をかけ、それぞれが撮影した写真を共有しながら、こどもの姿をもとに「こんなことをつぶやいていたよ」「どんな気持ちでいたのかな」などと自然な語り合いが生まれ、「どの姿に最も近いかな」「いろいろな姿がふくまれているね」と“10の姿”でみつめていった。

このような過程を通し、実践のふりかえりとして写真を用いることで、こどもの姿やイメージを教職員間で共有しやすく、こどもの育ちを再認識したり新たな気づきや視点が生まれたりすることの実感が高まっていたことが示唆される。中央教育審議会(2023)においても、「子供が主体的に遊ぶ姿や学びの過程について、写真や事例のドキュメンテーション等の活用により具体的に可視化を行いながら研修を行うことで、先生同士の子供理解が深まったり、保育への手応えややりがいが高まったりするなど、一層効果的に実施することが可能になるとの報告がある」と言及されている。さらに、語り合うことを通して、教職員の関係性も深まるとともに、大切にしたい方向性等の共通認識がより明確化され、個や園全体としての実践の質の向上へつながっていくと考える。



〔図8〕写真を用いて“10の姿”で語り合うことは、それぞれどれくらいつながると思うか

2.4 “10の姿”と保育実践（質の向上）について〔自由記述〕

「“10の姿”と保育実践（質の向上）について感じていること・考えていることなど」について、任意で尋ねたところ、〔表2〕の通り、11名より記述回答があった。

8月の園内研修をきっかけに、日々の保育において“10の姿”を意識することにつながったことがわかる。また、意識化される以前の日々の保育実践においても“10の姿”がはぐくまれていたことを再認識することで、さらに、筆者がとらえた日常のこどもたちの姿（写真）とつぶやきを継続的に紹介することで、保育実践への自信や意欲にもつながり、“10の姿”を通してこどもの育ちをふりかえることの意義を実感できたことが推測される。

“10の姿”を共通の視点として、日々のこどもたちの姿から園全体で保育をみつめなおし、とらえなおすことによって、個として集団としての育ちをとらえる視点がひろがり、自ずと日々の実践に生かされる。同時に、年齢をこえた育ちの“つながり”もみえてくることで、長期的視点でこどもの育ちをみとりながら、園全体で保育を高め合う雰囲気がひろがっていくと考える。

〔表2〕“10の姿”と保育実践（質の向上）についての自由記述

話をきく前は、恥ずかしながら、意識しながらの保育があまり実践できていなかった。行事ごとで意識をし、子ども達とかかわる中で、色々な面から子どもの姿を見ることができた。
日々保育を進めるのに精一杯な中、作ってくださった10の姿で客観的に子どもの姿を見ることで、こんなことを考えたんだななど感じることで良かった。
日々の生活に追われがちだが、10の姿を意識しながら保育すると、色々な面からこどものことを知ることができるのかなと感じた。
保育の中で10の姿があふれていることに気づくことができて、本当に良かった。また、保育に関わることがあれば今後生かしていきたいと思う。
園生活の中で色々な必要な事を子どもたちにわかりやすく伝えられるように心がけていきたい。その中で、一人ひとりの発達のスPEEDも違うので、さりげなくサポートできたらとも考える。
日々の生活の中で自然と育まれ身についていくように、環境を整え、関わり方を考えながら保育していきたいと思う。
「10の姿」を目的としてでなく、保育のふりかえり、子どもの姿の育ちをとらえる用い方にするべきである。目的のようにとらえ違っている先生もいるので、その点の認識の違いがないよう共通理解したい。伝えてほしい。
むずかしく感じていて…どう取り組んでいくのか、先生たちに意識してもらえるのかを悩んでいたが、日頃の写真を集めて、10の姿のどれにあてはまるかをやってみると、先生たちも「ここがないよね」「これにあたるよね」と盛り上がりつつの研修だった。先生たちと保育（園内研）について語り合う、それが何よりの実りだった。
来年度も、日頃の保育を10の姿の中で「どれにあたる？」と話し合えるような時間をもちたい。日頃の保育・あそびの中に全てがあるんだと…思えるようになり、子どもの声や1人1人の様子を、じっくりとみるようにもなったと思う。
「10の姿」を言葉で見たり聞いたりすると、すごく難しく感じ、子どもの姿をあてはめることができなかったが、写真を使っただけの読みとりはわかりやすかった。保育の中で「この表情などを撮っておきたかった!!」と後々後悔することが多い。（保育しながら写真撮るは難しい）今回、作品展で写真での読みとりを行い、学年では話し合えたが、園としてのわかちあいがたりなかったので、園内研修を通してわかちあいをしていきたい。
小学校へ向けての“10の姿”なので、年齢のひくい学年にはできなくはないが、あてはまる部分が少なく難しいと感じたが、作品展の展示のように全学年であわせた時には、学年があがるにつれての成長段階が目で見えてわかりやすかった。（学年ごとだと難しい）また、先に「ねらい」があつての保育とは異なり、後からありのままの子どもの姿から気づく“10の姿”をあてはめる方法は、さらに実践と振り返りをしたり、勉強の機会がより必要だと感じた。
今まで「10の姿」について知ってはいたが、難しいと感じていたので、園内研修を受けて、また、先生作成の子どもの写真と共にふき出しでつぶやきがかかっている書面を見て、こどもの姿の見方や考え方が変わり、良い機会をいただいた。

IV 総合考察

本研究において、“10の姿”を共通の視点として、写真や事例をもとに実際のこどもの姿をふりかえることを通して、さまざまな立場や視点から“みとり”を共有することで、「無意識の意識化（日常の“あたりまえ”の意味づけ）につながる」「“こども理解”が深まる」「こどもを“みとる視点”がひろがる」「教職員の関係性が深まる」ことが示唆された。

1 無意識の意識化（日常の“あたりまえ”の意味づけ）

園にとっては日常の“あたりまえ”が、異なる立場からみると新鮮であることも多く、“10の姿”という共通の視点を通して、無意識が意識化され、また新たな視点で意味づけがなされ、保育者にとって新たな気づきや自信につながると考える。

さらに、日々の園生活・あそびのなかに“10の姿”があふれていることを再認識するとともに、“あたりまえ”を見直す機会となり、日常をより大切にしたいねいな保育実践を意識することで、日々の生活・あそびがより充実したものになっていくことが期待される。

2 “こども理解”の深まり

こどもたちのやりとり（会話）をよくきいてみると、おとなの発想や思考をこえていることも多く、ずっと耳をかたむけていたいほど興味深くおもしろいものである。実際のこどもの姿（写真）から語り合うことは、保育者や撮影者がとらえた場面をイメージとして共有しやすく、やりとりも促進される。さらに、“10の姿”を中心に語り合うことで、こどもを理解する視点がひろがり、かわりにプラスの変化が生まれることが期待される。

一方で、担任が日常的に個々のすべてのやりとりをとらえて記録することは難しい。そこで、さまざまな場面を複数でとらえて記録し、定期的に全体で共有したり、外部の参観の機会を活用して、普段とは異なる視点からの気づきを共有する時間を確保したりするなどの工夫により、多様な視点が融合され、“こども理解”がより深まっていくと考える。また、あらゆる機会を活用して外部にも積極的に発信することで、家庭や地域もふくめた“こども理解”が促進され、地域全体でこどもたちをよりあたたかく見守る雰囲気につながることを期待される。

3 こどもを“みとる視点”のひろがり

筆者自身が小学校教諭という立場から継続的に保育実践の過程を参観することで、小学校との共通点・相違点をふくめ、小学校の教育実践においても参考になることが多くあった。また、こどもをみる視点がひろがり、これまでの実践について改めてふりかえり、とらえなおし、みつめなおすきっかけにもなった。

個々によって、校種によって、そして家庭や地域によって、日常生活を通してこどもにかかわるおとなには、多様な視点が存在する。そこで、こどもを“みとる”大きな共通の視点として“10の姿”を活用しながら、個々や幼小などの異なる視点で語り合っていくことで、それぞれにとって新たな視点が獲得され、こどもを“みとる視点”がひろがるとともに、多様な視点が融合され、また新たな視点（価値）が生まれ、深まっていくと考える。

4 教職員の関係性の深まり

日々の実践を共有し、自由に語り合う場があり、さらに“10の姿”という共通の視点があることで、会話内容がより深まり、同時に関係性も深まっていくと考える。そのためにも、園長のリーダーシップのもと、同じ方向性のもとで立場関係なく率直に語り合い、実践に柔軟に生かす（試す）ことができる雰囲気づくりが欠かせない。

幼小など異なる立場においても、“こどもの姿”を中心とした語り合いを通して、立場をこえた教職員どうしとの関係性が深まるとともに、それぞれの保育・教育実践力（質）の向上へつながっていくことが期待される。

V 今後の展望

寺山(2024)においても述べたが、今後も、“10の姿”を幼小をつなぐ共通の視点として、多様な“10の姿”を「実践から“みとり”」「実践を“意義づけなおし”」「実践に“生かす”」ことで、幼児教育の実践とともに、個や集団としてのこどもたちの姿（成長）をつなぎ、さらにひきだしていきたい。また、家庭・地域もふくめ、写真等の効果的な活用も工夫しながら、“10の姿”をもとに日常の姿のなかにある小さな感動を多様な視点から語り合う機会を積み重ねていきたい。そして、“10の姿”を通して幼小がつながり、幼児教育の視点と小学校教育の視点が融合することで、それぞれの認識や実践に変容をもたらし、相互の質の向上につながることを期待したい。

また、中央教育審議会(2023)において、「幼児教育施設の先生の資質・能力や専門性の向上を図る観点から、地方自治体や幼児教育施設においては研修を更に充実することが求められる。しかし、地方自治体や幼児教育施設の出組の差が大きいことや研修に参加しても必ずしも日々の教育実践に還元されていないという課題が生じているとの指摘もある」「幼児教育施設や先生から希望する研修テーマ等を聞き取り、ニーズを踏まえた研修を企画することで、研修への参加を促進することも重要である」と言及されている。小学校においても、ニーズに応じた継続的な研修内容の工夫によって、より明確な目的意識をもった参加が促進され、さらに、実際の“こどもの姿”を語り合う機会の工夫により、こどもを“みとる視点”をひろげることで、日々の教育実践への還元が期待される。

『こども基本法』の基本理念のひとつでもある“こどもの今とこれからにとって最もよいこと”について、日々のこどもたちの姿をもとに、園・学校全体で、さらには市全体で考えながら、自ずと「こどもの権利」の保障につながる体制づくりが管理職・行政のリーダーシップのもとで促進されていくことを願っている。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会初等中等教育分科会(2023)「学びや生活の基盤をつくる幼児教育と小学校教育の接続について～幼保小の共同による架け橋期の教育の充実～」文部科学省
- 寺山陽子(2022)『学びのつながりと互惠の関係を生かす継続的な幼小連携・接続一児童・保護者・教職員/保育士へのアンケート調査からよみとく認識の共通点・相違点から一』京都教育大学大学院教育学研究科修士論文
- 寺山陽子(2024)「幼児教育施設と小学校をつなぐコーディネーターの意義と役割ー“幼小かけはしコーディネーター”としての現場実践を通してー」京都教育大学教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要 (6), 1-10
- 文部科学省(2018)『幼稚園教育要領解説〈平成30年3月〉』フレーベル館